第１回赤羽萬次郎賞「学生の部」で

本校２年　東田陽子さん「最優秀賞受賞」

北國新聞でも既に報道されましたが、本校２年生の東田陽子さんが「第１回赤羽萬次郎賞」の「学生の部」で「最優秀賞」を受賞しました。赤羽萬次郎賞「ふるさとへ」は、北國新聞の創刊者赤羽萬次郎の生誕150年を記念して「金沢ふるさと偉人館」と「北國新聞」が今年度より創設した賞で、今回のテーマは「舞台芸術の振興」でした。東田さんは、金沢大学附属高校開校記念祭伝統の「歌舞伎公演」をテーマにした論文で応募して、見事最優秀賞を獲得しました。以下に東田さんの論文を掲載して、ご紹介いたします。

舞台芸術のメッセージ

東田　陽子

全ての芸術作品はメッセージを持っている。寓話のようにストレートな考えを伝えてくるものはもちろんだが、いわゆる娯楽芸術であっても、見る者が何かを感じれば、それがその作品のメッセージになるのだと思う。

私の学校では、秋の開校記念祭で歌舞伎を上演している。50年近く続く伝統だ。今年の演目は「勧進帳」。誰でも話の内容は知っているから演じやすいが、だからこそいい加減なものには仕上げられない。

去年、先輩方が演じた歌舞伎は素晴らしかった。細かいところまで行きとどいた演技、独特のセリフの抑揚もしっかりついていた。茶屋のセットもまるで本物のようだった。太刀のシーンは動きのリアルさに思わず息を呑んだ。月並みな表現だが、感動した。

今の時代は、わざわざ舞台を見に行かずとも、テレビやインターネットでそれに値するものを鑑賞できてしまうという現実がある。しかし、（いかにきれいなハイビジョン映像や３Ｄであっても）画面上の映像を見るのと、生の芸術を見るのとでは根本的に違うのだ。

私は幼いころから母に連れられて多くの演劇公演を見に行った。自分の目の前で繰り広げられる、華やかだったり悲惨だったり滑稽だったり感動的だったりするもう一つの世界に目を瞠ったことを覚えている。その経験から考えても、役者の息遣いや、大きな音が出たときに体で感じる響きといったものは、決してテレビでは味わえない舞台特有のものだ。　メッセージを伝えるために、舞台芸術ほど適したものはない。思いをこめて公演を行えば、観客がそれを体で実感してくれる。赤羽萬次郎氏が、演劇を通して「自由民権」の思想を人々に伝えようとしたのはそれを感じていたからなのかもしれない。

私は、去年の記念祭の歌舞伎公演を見て「感動」というメッセージを受け取ったように思う。高校生であってもこのように素晴らしいものを作れるのだという、「自分たちの高い可能性」も伝えてもらった。今度は私たちの学年がメッセージを伝える番だ。スタッフとして公演に携わり、いい作品を作れるよう協力していこうと思う。

多くの作品を鑑賞し、自分自身でも舞台芸術に関わることは誰にとってもいい経験になるに違いない。